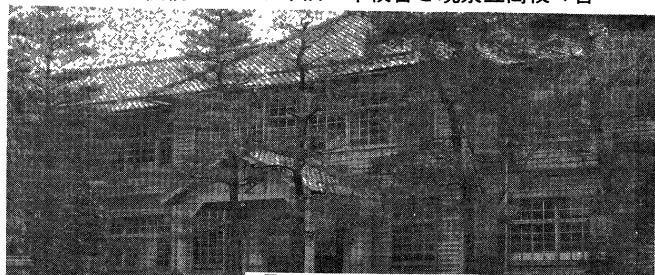
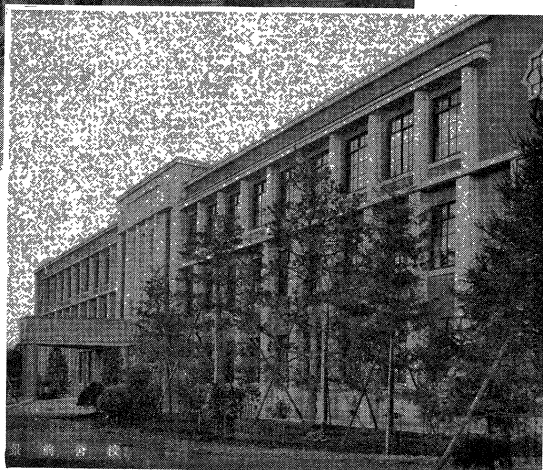
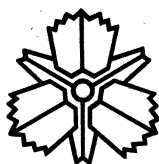


歴史と伝統にかがやく旧一中校舎と現泉丘高校々舎



一泉

発行所
〒921 金沢市泉野出町
3丁目10-10
金沢泉丘高等学校内
一泉同窓会
電話(0762)42-0211



『一泉』の発刊に際して



一泉同窓会々長
宮 太郎
(二 中五十一回卒)

旧金沢一中が第一回の卒業生を出したのが明治二十七年であり、当時の卒業生は僅かに三名でした。爾後毎年その卒業生の数も増加し、明治四十一年、第十五回の卒業生を以て九百二十二名、約一千名を数うるに至ったので、一中同窓会を組織する議がおこり、同年八月二日に創立総会を行ったと聞いております。

以降昭和二十三年三月、学制改革により第二学年修了生を最後の会員として、母校金沢一中は終了しました。

その後は新制の金沢泉丘高校が発足し、昭和二十九年の卒業生まで泉丘同窓会を結成していたのであります。

すが、当時の泉丘同窓会の会長であった山本外吉校長より、両同窓会の深い因縁に思いを致たされ、更に同校の将来にも意をよせられ、両同窓会を合併し、互に旧情を温め、且つは又泉丘高校の健全な発展に寄与あらんことを申し出られました。

これを機に翌三十年二月、「一泉同窓会」が新たに発足することになったのであります。

本多の森に対する憧憬、泉ヶ原の白亜の校舎への愛着等々、時代的には夫々ズレはあるが凡て八十余年にわたる母校の歴史を誇る思い出深いものとして私達の脳裡に深くきざまれ、忘れることの出来ないものであります。

吾々の植えた常盤木は幹も枝もスクスク伸び緑の色の濃さも、これから一きわ冴えてくることでしょう。

一万八千余の会員各位が環境を同じくし、感激を共にした母校を中心として、意気相投じ、大同団結し、在校時代の青春の闘志を以て自らの職域に敢闘して、一方母校の今後の発展に関心を寄せられることをお願いいたします。

みなさんの益々のご健闘をお祈りします。

「一泉」発刊によせて



現泉丘校長
大 高 彰 八

基本設計の段階にまで作業が進んでいると聞いております。

「七十年史」によりますと、「こ

ある日、同窓会事務局長の西多さんから、「今度『一泉』を出すことに決ったので、何か書いてほしい」とのご依頼がありました。私は、生まれた土地も、卒業した小・中学校も石川県ではありませんし、本校へ赴任しましたのも昨年3月からにすぎません。

「他に、より適当な方がいらつしやる筈」と再三にわたってご辞退申しあげましたが、「現職」なるがゆえにと押切られて、この貴重な紙面をさいていただくことになってしまいました。大変光栄なことではあります。同窓の皆々様には、ご迷惑なことであろうと恐縮しております。

さて、本校校舎は、建設されてから、もう四十有余年で、外観はともかくとしても、内部は、老朽化が相当進んでおります。PTAや同窓会の方々のお力添えもあって、県当局は本腰を入れて全面改築の方向を打出され、現在は、基本構想が定まり、



元泉丘校長
張 江 啓
(二・中三十九回卒)

雑 感

この度は同窓会の会報を発刊する運びになった由、御同慶にたえませんが、市内のいくつかの高校の同窓会でも、既に会報や機関誌を発行しているところがあって、本校でも発刊の企画が望まれていただけに喜ばしい。年に一回の総会では、細かい点にまで触れる時間も少なく話題に不足することもあります。会報は全員に配布することは無理としても各期の会合や総会で同窓会の動きを知らせるすべしに限り、話題の材料にもなるだけに更に同窓会の動きも活発になることでしよう。

* * *

この「一泉」を通して、同窓会の各位の方々が、懐旧の思いをはせたり、旧交をあたためたりされること、ひいては、母校を偲ぶよすがともなれば幸と思つて、近況をつづり思っていることの一端を述べました。各位の御健勝と御活躍を心から祈りして、つたない文を終わります。

この度は同窓会の会報を発刊する運びになった由、御同慶にたえませんが、市内のいくつかの高校の同窓会でも、既に会報や機関誌を発行しているところがあって、本校でも発刊の企画が望まれていただけに喜ばしい。年に一回の総会では、細かい点にまで触れる時間も少なく話題に不足することもあります。会報は全員に配布することは無理としても各期の会合や総会で同窓会の動きを知らせるすべしに限り、話題の材料にもなるだけに更に同窓会の動きも活発になることでしよう。

ん。社会に出てある程度の安定を持つまで関心を持たないこともあり。横のつながりの人達の数が少なくなつて縦へつなかりを求める人もあります。

横の動きはそのグループの人にはつかみやすいが、前後の時期の人にはつかみ難いものです。会報は横の関係を縦の關係に結びつける役目をするものだと思います。

* * *

私達の同期のグループは昭和七年卒業を基準にしているので七桜会と称しています。毎年地元を中心に会合を重ねて、そのうち数年毎に全国大会を開いています。昭和五十六年には卒業五十周年の全国大会開催を計画しました。名簿の整備も概ね終り、通信費の確保によつて連絡の緊密を図つていくつもりです。

六桜会も同年に開催の計画を持つておられるようです。こうした同期会が同窓会の基盤になるものだと思います。会報がこれを結ぶものになることを願っています。

(金沢工大講師)



「一泉桜美会」紹介



元一中・泉丘教諭
宮沢 外与治

昭和48年が石川県立金沢第一中学校の創立80周年に当りましたので、それを記念して旧一中の絵画部に在籍した人達を中心となり、先輩並に現泉丘高校卒業生を加えて「桜美会」を結成致し、同窓会会長・宮太郎氏のご賛同も得て、片町大和デパート本店で第一回桜美会美術展を開催いたしました。それ以来、毎年十月中旬の母校創立記念日の前後に大和のホールで約一週間を会期として開催しております。

昔の仲間達が交誼を深め、互に学校時代を偲ぶと共に、今後共好きな美術の道を共に歩もうという事なのです。

今までに連続7回、毎年会場で同窓生が顔を合わして「オマン上手になったナ」とか「君にこんな才能があったがカイヤ」とか、大和の会場が楽しいクラス会会場にもなっており、今では恒例の大和会場の名声あるローカル美術展となったようで、プロの人達の間でも評判になっているとか……。

会員には大正4年卒鏑木勢岐先生(水彩画)・大正15年卒の井口政雄氏(チャールズ会金沢会員)・特別

会員に大正4年卒杉村ト貝子氏・大正11年卒黒田桜の園氏・大正13年卒原田太乙氏その後輩に昭和7年卒、日本工芸会理事・截金無形文化財記

録保持者西出大三氏・昭和十年卒、二紀会理事、彫刻堀義雄氏・昭和13年卒、石川県無形文化財、刀剣家隅谷与一郎氏、更に一陽会理事、北陸支部長、洋画中村秀雄氏らの諸君を始め多数の中央展入選者を網羅し、

会員も現在では90名に達しています。当初は絵画・彫刻で発足いたしました

が、最近では写真・書道・陶芸等を加え年々愉しみを増しております。

女性会員も15名になりました。全国でも珍らしい美術同窓会となっております。

今年もまた10月中旬をメドに第8回の計画が出来て居ります。

それだけに会員同志、毎月一回の研究会を開き研鑽を重ねております。

入会ご希望の方は事務局・斉藤弥吉氏宛にご連絡いただければ結構です。

「桜美会」は絵画部OBの意義も含めて宮沢が命名いたしました。

尚事務局は金沢市南森本町ワ31の
4 ☎〇七六二一五八一〇三三三
斉藤 弥吉方
「一泉桜美会 美術研究所」
本年度より新設いたしました。

一中の和算書について

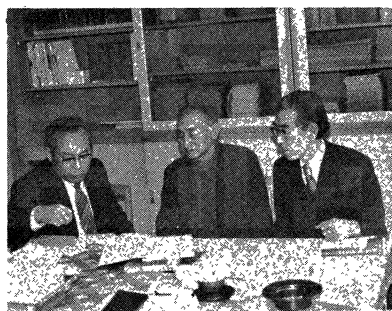
泉丘高校教諭
垣内 謹治
(一中五十四期)

母校に勤めて十三年、教えた生徒がみんな優秀で、しかも自分の後輩であると思うと、こんな楽しいことはない。

父(死亡)と私が一中、第二人が

泉丘、息子が一年生と、わが家の男性はみな一泉同窓生で人一倍母校愛に燃えている。先日もあるお方から「謹ちゃん泉丘に骨を埋めるそうやな」と言われビックリしたが、学校には矢張り鏑木先生や吉野先生みたいな、同窓会の中心になれるお

方が居られないといけないように思われる。



書庫にて垣内、山森、西多氏(左より)

ところで、昨年から郷土史家の山森青硯氏(一中三十三回卒)の御指導により、泉丘高校の図書館にある和算書や明治時代初期の数学の洋書などを調べているが、素晴らしい名著が沢山あるので驚いている。

元朱世傑撰「算学啓蒙」(六五八)

呉繼綬著「算法統宗」(六八八)

関孝和遺稿「括要算法」(七三三)

中根彦循著「竿頭算法」(七三八)

梅文鼎著「算指南序」(七六七)

有馬頼僮著「拾機算法」(七六七)

村井中漸著「開商点兵算法」(七七〇)

藤田定資著「精要算法」(七八二)

阪部広胖著「精要算法解」(七八四)

藤益根解説「周髀算經図解」(七八六)

会田安明著「算法古今通覽」(七九五)

「最上流算法天生法指南」(八二一)

川井久徳著「算術開式新法」(八二六)

権律師忍澄撰「弧矢弦叩底」(八八八)

石黒信由著「算学鉤致」(八八九)

武田真元著「階梯算法」(八九〇)

千葉胤秀著「算法新書」(八三〇)

榎豊後著「照闇算法」(八四二)

長谷川弘著「算法求積通考」(八四四)

武田多則著「真元算法」(八四四)

偉烈重力著「数学啓蒙」(八五三)

五十嵐篤好著「新器測量法」(八五五)

など、紙面の都合でとてもその全部を書きあげることではできないが、これらの和算書の多くは「明理堂」

なる蔵書印が押してあるので、郷土の和算家中野庄兵衛（号は明理堂）の蔵書であったのであろう。

中野庄兵衛は寛政十年に明倫堂の算学師範となり子弟の育成に努力した偉人である。ただこれらの本がどうして一中にあるのかわからない。御存知の方がおられたら御教示願いたい。

泉丘の図書館には和算書の他にも膨大な和漢書があつて、近く山森青硯氏の監修によってこれらの「善本解題目録」が出版される予定であるが、加賀百万石の藩校であつたその伝統の重みを今更のように感じさせるものである。

和算の評価は学者の立場によっていろいろ異なるが、江戸時代の科学技術史を調べるためにはこれらの和算書が是非とも必要である。特に大工の棟梁などは相当な和算家であつたのではなからうか。

私が泉丘を去つたら、これらの和算書を誰が大事にしてくれるかと思うと寂しいが、定年になつたらゆっくりと、二十一万石の久留米の殿様が書いた「拾瓊算法」でも訳して暮そうかとも考えている。

同窓の随筆

「天文版論語」と「春日懷紙」

山森青硯
(一中三十三回卒)

金沢市東山三丁目二ノ二〇米沢喜六氏（一中大七卒）が稀覯本「天文版論語」を蔵しておられる。私は文化財保護審議会専門委員川瀬一馬氏を伴つて同家を訪うたのは、昭和五十三年十月廿七日であつた。その日は丁度泉丘校蔵「墨子」を見て貰うた日であり、先生は多忙を極めておられた。先生本書を見られたのは始めではなかつた。二十余年以前、東京に於いて一瞥され、箱書き迄いつていたのである。先生、或る事情により、此珍籍が米沢本なることを未知のまま過ごされたのである。

抑々この論語というものは、我が応神天皇の頃（四五世紀）日本へ伝来し、我邦学問道徳の骨幹をなしたといつても過言であるまい。爾来写本のまま伝わり、正平十九年（一三六四）の「正平版論語」が、発刊論語の最初のものであつた。その後天文二年（一五八二）大阪の堺で、阿佐井野宗瑞という人が「天文版論語」

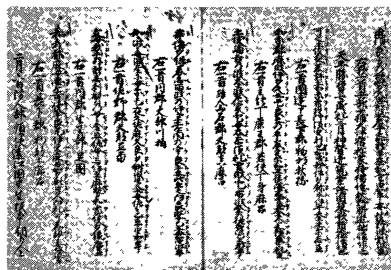
を開版された（これが米沢本である）。然しながら「正平版論語」の初版本は、一冊が大阪府立図書館と宮内庁資料寮とに分割保存されているに過ぎず。それ故完全なる姿で保存されている「天文版論語」（米沢本）は日本最古の論語と言へるのである。本書は元京都妙覚寺の什物であり日奥上人の朱書がある。妙覚寺は天正十年（一五八二）本能寺の変の時、信忠（信長の嫡子）の宿舎であり、日奥上人又その時の常住（住職）であつた。同寺は本能寺と共に、明智光秀の為に灰塵に帰したが、この什物「天文版論語」だけが残つた。言を換えれば、昭和の今日約四〇〇年の米沢本だけであると言えるのである。豪華な二冊本、当時の貴賓手沢がにじみ出ている。どうしたことかこの珍本が加賀前田家の蔵品となり、

明治維新の同家売立の時、写本「古今和歌集」等と共に一括米沢家に移つたのであろう。因に逸早くこれを珍籍と鑑したのは、畏友大鋸彦太郎氏（一中大七卒）であつた。数ある什物中、この一点を鑑した大鋸氏の慧眼、寔というべきである。

昭和三十八年一月（一九六三）大鋸氏、龐大な古文書「春日懷紙」（春日本万葉集断簡）発見のとき、我家に帰る暇なく、最も近距離にあつた盟友米沢喜六家に飛込み、金一万円を一時借用、間髪を入れず名宝を手に入れたと聞いている。

以上二書は金沢の宝でなく、日本の文化財である。川瀬博士は双手を挙げて賛しておられる。一泉同窓会書誌学が結ぶ桜章校佳話として永遠に残るであらう。

（石川郷土史学会員）



光陰矢の如し



近藤 師家男
(一中三十七回卒)

「光陰矢の如し」とは、中学時代に漢文で習った言葉である。歲月などというものには関心の無かった青少年時代の私も、あと三年で七十才になろうとしているこの頃では、この言葉の意味が痛い程、身にしみるのである。歲月は遠慮なく、自分の時代を過ぎ去り、子供の時代、孫の時代に移ろうとしている。

あの若かりし頃、本多の森で共に学び、共に遊んだ級友達は、今頃どうしているのだろうか、と思いを懐かしんでいた折も折、金沢在住の級友、竹田長松君や、黒田辰夫君等の尽力により、全国に散らばっている級友に呼びかけ、昭和五年卒業の同級会(三七会)を開催してもらえた事は、望外の喜びであった。

卒業五十年目の会合である。時は昨年九月二十八日、先づ級友物語者八十余名の御遺族参加のもとに、慶覚寺にて物語者の法要を営む、御遺族との昔の物語り、級友との再会の喜び、話しは尽きない。

夕刻より栗津の法師で級友会、満

木、宮沢の両先生を中心に、級友、同伴夫人を含め計五十二名、級友の頭に、顔に、又物腰に、五十年の風雪に耐えた貫録がにじみ出ている。宴たけなわにして一中の応援旗が飛び出し、期せずして校歌の合唱となる。この一夕の「歓」の描写は私の筆にては現し得られない。

翌、朝食後、満木先生の思い出のお話を講話として聞く。級友一同昔の生徒にもどった様である。宮沢先生の筆になる銘「白山」の色紙を一同に下さる。

ああ、この一日は私の人生に忘れられない一期一会の思い出である。爾来、三七会の在京の士は月一回、会合し、又関東一泉会にも出席者が多い。
(神田産業㈱社長)

過ぎた日の思い出



南 秀男
(一中四十一回卒)

昭和四十九年十一月二十七日(休)は国鉄のストの日でした。かねて中学時代の同期生K君が日通の東北支社長として仙台に住んでいて旅行好きの私に仙台まで遊びに来ないかと招待してくれていたのです。新幹線経由で東京に出て、それから東北線に

乗り換える仙台までのコースの切符を買い求めてあったところ急に雲行きが悪くなり、当日はとうとう国鉄がストに入ってしまった。

そんなことも無頓着にどうせ切符も買ってあることだしと、当日朝金沢駅に行ってみると運よく午前六時三十三分発米原行きの加越二号が一本だけ運行されるとのこと、それなら新幹線ととにかく東京までは何んとか出られるワイと飛び乗った。

東京駅に着いて仙台のK君に電話を入れると羽田発の全日空はどうだと交渉してもらったがこれも満席。

郡山まで支社長の車が迎えに行くからなんとか郡山まで来れないかとのこと。それではと雷門から東武線で宇都宮まで出ることにした。宇都宮には矢張り慶応の同期生S君が信用金庫の筆頭常務でいる。彼に頼めばなんとかなるだろう。どだい国鉄ストの最中に金沢から仙台まで旅行すること自体が無茶な話である。午後

の二時に宇都宮に着いて彼S君を銀行に訪ねその旨話すと二つ返事で俺の車を出そう、郡山まで俺が送る。道中積る話もしないからと愈々ドライブ。道程一〇〇軒の郡山に午後六時に着くと黒塗りのクラウンの支社長の車が日通郡山支店に待っていてくれた。車を乗り継ぎ又々仙台までの一〇〇軒のドライブ。

首を長くしてK君が待っていてくれた仙台郊外の秋保温泉にたどり着いた時は夜も遅い午後十時半。久しぶりの再会でユックリと旧交を温めたのは勿論のことである。

国鉄のストの日に金沢から遠く離れた仙台まで行けたことが今思い出しても不思議な位である。

閑話休題。言いたいことは同学の士というか同期生のよしみというか利害関係を離れた友情が如何に有難いものかということである。今でも当時を思い出し、同期生としての友情の有難さをしみじみと感じているのです。翌日は松島や塩釜の見物を楽しみ、ストが解除された二十九日(金)、仙台を発って東京経由で金沢に帰りました。その時の同期生K君は今も日通本社为重役として東京で活躍しています。
(エム・コックスサービス㈱社長)

一中卒業40周年のたわごと



大蔵 吉夫
(一中四十七回卒)

泉丘高校は本年改築されると聞いているが、昭和13年あの本多町から地黄煎頭の新校舎へ移ってからはや43年、そしてわれわれも本年は卒業

40周年記念同窓会を9月14日夕べ、金沢で開催することになっている。

おもえば昭和15年百六十六名の卒業生のうち戦争のために幼年学校、陸士、海兵に入学した友も多く、その他の大学、高工、高商を卒業したのも、殆んどが出陣した。一中同窓会の中でもわが期は一番戦死者が多いらしい。名簿からみても、死亡者は46期42名、47期46名、48期32名、49期35名、50期21名である。心から冥福を祈りたい。

一中スピリットをたたきこまれた友は、若さとファイトで一番先に戦場へ突っこみ、特攻機と共に散っていったものや軍鑑と共に沈んでいったもの等の顔が浮んでくるようで、万感胸にせまるものがある。

生存者は、国會議員坂本三十次君ら県会、市會議員3名、医師10名、先生12名、官公庁12名、会社役職員46名、自営12名その他で、定年により第二の人生をスタートしたものならびにしつつある者等、まさに変転の年であるが、57才はまだ若いといわれる。孫がいても若いとは思議なことになったものだが、日本人の平均年齢に達するまでには、まだ15年もあるが、確かに人生熟年の年であらう。

戦争を体験したわれわれは、最近の米ソの動き、中近東の姿はあの大

戦の前夜のように思えてならない。国のために死ぬことを教えられ、何の疑問も持たなかった青春を思うと

全方位外交の今の日本の国力のお粗末さが身にしみ、将来の日本が思いやられるが、経済大国にした英知と努力を、これからどんなリスクにも対抗できる日本にしなければならぬ。このために泉丘高校卒業の若いこれからの皆さんにお願いしたい。県民、市民のせまい意識から眼を国のためにむけて頂きたい。

世界の日本である。金沢一中にはそんな伝統があった。日本の今後のために一泉健児の健闘を祈ろう。

(北陸電設(株)社長)

「惚葉」 ほれぐすり



中谷 道子

(泉丘六回)

四季の中で私はもともと秋が好きである。

ある初秋のこと、子どもをつれて医王山へ「マタタビ」を獲りに行った。私が加入している自然保護の人たちと医王山へ遊びに行ったおりにふと見つけた大切な「マタタビ」のバンパである。泉丘高時代、当時の浜名先生、北市先生、釣谷先生方に

つれられて胸乱を担いでまるで我が庭のように医王山をかけ廻ったのももう二十五年も前のことである。

麓の方はすっかり変貌しているが山の中に入ってしまったえばそれほど変ってはいない。狭い石ころ道に植物などもおい茂っていてふと感傷を覚えたりもした。

いわゆる「ソオケ」に一杯のマタタビの実は、ホワイトリカーと氷ざとうで「マタタビ酒」を造るのが四十才をはるかに過ぎた私の道楽なのである。青い実だけではなくてその蔓や葉も、家で帰りを待っている六匹の猫たちへの大切なお土産で、これを陽に干し手でもみ粉にすると、これが又、猫の常備薬にもなる。「猫にマタタビ」とはうまく言ったものでこの蔓や葉の上で猫たちは喉をゴロゴロ鳴らし体を痙攣させて喜ぶ。これを吸いすぎると呼吸マヒを起す、と言われている。一種の媚薬なのかも知れない。

おもしろいことにはこのマタタビ酒の瓶のかくす場所をあちこち変えてもすぐに猫たちはその場所へたむろしてしまふ。ある日、マタタビ酒の一瓶を友人宅に持参する為車に載せて出かけた。途中、用事で駐車して約二十分後に車へ戻ったが、車体の上に野良猫が2、3匹も乗っかっていて大変吃驚したことがあったが、

まさに子どもたちにお菓子やマンガ、男たちには女や酒、と同じ類いののかも知れない。

因みに広辞苑で媚薬の項は「相手に恋慕の情を起させる。『惚葉』と書かれてあった。もつとも、これがマタタビと猫ではなんとも色気のない話ではある。(中谷病院々長夫人)

学校と私



普神 貴行
(一中五十六回卒)

母校が改築されるという話を昨年聞いた時ある感慨にうたれた。

わたし達が生徒の頃、よく一中の先輩諸氏から本多町の旧校舎を懐かしむ声を聞いたものである。この人達にとっては富樫町の新校舎は馴染めないものだったらしく、新校舎へ来ても母校へ帰って来た気がしないと言っておられた。

わたしが一中に入学したのは昭和十九年の四月であった。はじめて一中生としてあの校舎に足を踏み入れた時の感激と一種の恐怖心は今も忘れられない。考えてみれば、あの校舎が竣工してまだ六年半ほどしか経っていないのである。田舎の小さな小学校から来たわたしの眼には

どつしりとした豪壮な外観と、内部の広大さ、廊下の広いこと、がっしりと太く頑丈な柱と大理石の階段、磨き上げられた床、高い天井など、何か圧倒されそうに感じられた。先生方も皆威厳があり、近寄り難い偉い人に見え、すっかり畏縮してしまい、一年生の一学期はノイローゼ気味で場違いなところへ紛れ込んだような落ち着かない気分であった。そのうちに太平洋戦争の戦況が怪しくなり、本土決戦が話題になったり、勤労動員に駆り出されたりしている中に終戦となり、中村校長辞任、竹沢校長着任、事務室校長室の火災があり、この時校舎が随分傷んだように思う。そして昭和二十三年の学制改革、一中、二中、三中の生徒をこの校舎に収容して金沢一高として発足した。校舎はこの一年間でひどく荒廃してしまった。昭和二十四年には新しく男女共学の金沢泉丘高校が発足し、わたしはようやく二十五年三月泉丘第二回卒業生として六年間を過ごしたこの校舎を巣立つことができた。まことに目まぐるしい激動と混乱の六年間であり、真新しく威厳に満ちていた校舎も、この激しい時代の嵐の中で急速に荒廃していったように思う。

わたしが再び母校に舞い戻ったのは昭和二十九年四月、新任教師とし

て母校に奉職することができた時であった。四年間で学校の内外の様子は一変していた。学校のすぐ北隣りにあった陸軍病院泉野分院跡は畑になつていたし、地黄煎町から富樫町に抜ける旧鶴来街道と学校の間に広い新道ができていた。生徒時代の様々な思い出を秘めた通学路がその姿を一変していたのである。校舎は卒業した当時にくらべると多少整備されて落ち着きをとりのどしていた。山本校長をはじめ、先生方の半数は生徒の時教で頂いた懐しい恩師であった。そうした恩師の温かい眼に守られながら教職生活をスタートできたことは本当に幸運であったと今でも感謝の気持で一ぱいである。

しかも二十一年の長きにわたってこの学校に居座り続けたわたしにとって、泉丘高校、あの校舎は文字通りの母校となつたのである。教室の一室一室、校舎の隅々や校庭の樹木の一本一本にもわたしには懐かしい思い出があり、わたしの人生の哀歓の記憶が刻み込まれているのである。かつて本多町の旧校舎から今の校舎に移転が決つた時にも、多くの同窓の先輩方が感じられたに違いない感慨もこんなものでなかったかと思うのである。

(錦丘高校教諭)

同窓会に想う

矢来 和子

(泉丘三回)

立春も過ぎ、少しづつ日差しの暖かさがわかる日頃となりました。何から書けばよいのか迷いましたが、私は一泉同窓会に出席させて戴いた時の、先輩の方のお話を書かせていただく事に致します。

毎年十月十五日、神明神社の祭礼が近づく頃、今年も又、出席させて戴けることをあれこれ想像して楽しんでおります。

同窓会に出席させて戴く様になつて、十年余りになりますが、一年一年若い人達の成長が目立つ様になり「良かった」と思う反面、故人となられた人もあり、淋しい思いも致します。今は故人となられました英会長がよくお話しされた事を、皆様にも知



つて戴こうと思います。

「私は同校在学中は、勉強もせず居りましたが、どうにか卒業させて戴きました。(中間に色々面白く話されましたが)卒業させて戴いたお札に、同窓会の仕事を手伝いさせて戴いております」と言われました。御歳の先輩にして、その様な「卒業させて戴いた」というお気持ちで居られるのかと、心暖まる思いになりました。

現在、校門をくぐり、正面玄関に向う時、先輩の皆様方と後輩の皆様方の交流が、今以上に盛んになる様にと祈りながら通っております。

(一泉同窓会副会長)

母校に想う



福田 太 睦

(泉丘八回)

私達、泉丘八期生は、昭和三十一年三月に五百五名卒業した。クラスごとの同窓会は時々催していたが、全体としては一カ年程の準備期間と名簿作成後の五十二年二月、各地より七十余名が集りはじめて旧交を温めた。

過般の一泉同窓会名簿作成時には、同期仲間が何度か打合せしながらも、

すでに八名の先き立つ同窓生を数え、九十余名の方々が不詳となったこと、申し訳なく残念に思います。他期同窓生の詳細な調査を見つつ努力の不足を感じます。

昨今は同期連中がくつたくないう会合として時に集り、語り、政治に志すものを推したり、ゴルフに集るなど、楽しい時もあります。

これも、かつて母校泉の野に力一杯、思いきりエンジョイした青春のつながりであります。白山に登り、能登の浜にテントをかつき旅をした、実験畑の栽培場で、宿直室のスキヤキをつき宿り、夏休みに木を植え池を修理し、中庭を完成させた等の想い出の母校です。

近時、何度か母校を訪問し、玄関たる正面のいたるところ、車が乱雑に放置され、殆んどが前部よりつつこんだままであります。

家庭を訪問するとき、その玄関を見れば家風が判ると申しましたごとく、靴のぬぎ方一つで判ります。生徒が乱雑なる車間を身体をよけつつ通るのを見て残念でした。せめて五分の余裕あれば、きれいに並べて、次は安全にスタート出来易いよう、前向きにおけるのです。先輩を祭る厳霜碑の前も同様であり、申し訳ない感がしました。

私達は母校の発展に限りない誇り

と、愛着をもつ者として、過去のよき時代とはいかなくても、先生と生徒が一体となった新しい学校の発展を願い、同窓の輪が、さらに一段と大きく拡がることを祈つてやみません。
(福田染色精練機専務)

一 泉会だより創刊を祝う

広 部 和 也

(泉丘一〇回)
早いもので、私達が泉丘高校を卒業して22年がたった。私達が在学した昭和三〇年四月から三三年三月までの三年間は、戦後史の中でも、最も重要な一時期であつたといえよう。国際社会は、対決しながらも、冷戦から平和共存へ大きく転換をみせはじめていた。

ICBMと人工衛星の成功、第一回A A会議、スエズ動乱、ハンガリー事件、日ソ共同宣言、日本の国連加盟など、大きな出来事でその後の世界状況、日本外交に影響をもつものをあげることができる。しかし、当時の私達が、そのような事件に何らかの認識をもち、何かを教わつたという記憶は殆んどない。私達の高校生活とは、全く無縁の存在であつたということであろうか。

というのも、職業柄、しばしば、大学の新生相手に国際問題について話すことがある。ところが、関心

は薄く、イラン問題やアフガニスタン問題などは全く知らないという学生がいたりする。聞くところによれば、新聞の政治・経済欄を読む学生が非常に少ない。高校の「政治・経済」で習うことと現実の状況とはどうも別のもののようである。大学生も、学年を重ねるにつれて関心は広がって行くが、まだ、高校生気分の抜けない新入生であれば無理からぬことであろう。

ところで、話は変わるが、昨年(五四年一月)、関東泉寿会の発会式に出席し、二年ぶりで同窓生諸兄と相見える機会を得た。最初は変貌著しい者も多く、なかなか判別し難い。しかし、今年の第二回会合では、殆んどが昔の学生服姿と一致するようになった。

外観の変化はともかく、雰囲気、言葉、態度など高校生さながらである。恐らくは、家庭や職場ではみせない顔がいくつもあつたであろう。そして今、考えてみれば、昨年も今年も、当然のことながら、石油やイランやアフガニスタンが話題にのぼるといふことはまず無かつた。たしかに、高校生活と国際情勢とは無縁のもののである。

「一泉会だより」の発刊を心から祝し、末永く続くことを祈ります。

(成蹊大学教授)

泉丘校々舎改築にあたり

泉丘高校事務長

西 川 英 威

「見はるかす、加賀野の果に：岩のごとくそり立つ学び舎」校歌そのままに泉野台にその偉容を誇り、幾多の俊秀を育くんできた泉丘校々舎も、昭和12年創立以来四十年余の風雪による建物内外の老朽化は想像以上に甚しく、毎年つぎこまれる補修経費も多額に上り、危険防止、保安衛生等管理の面にも支障を生じる有様であります。

爾来、同窓会はじめ各方面より協力にて全面改修への請願陳情を続けて参りました。これにこりこの度、県教育委員会に於て全面改築が定まり、昭和五十五年度に着工の運びとなりました。

卒業生の皆様には、この思い出多い懐しの母校の一木一草はもとより、校舎のすみずみに至るまで感慨一しおのことと思います。現在設計中で細部にわたつては未定ですが、この全面改築のこの機会に是非来校され、今一度想い出深い学び舎をご覧になるよう、お待ち申します。

同窓会の集い

◇五十四年度総会と物故会員慰霊祭

昨秋十月十五日母校の創立記念日に当る当日、一泉同窓会の五十四年度総会及び物故会員の慰霊祭を挙行了した。



まず慰霊祭は午後三時から泉丘高校前庭の巖霜碑前に神式で行われた。司祭を石浦神社長谷宮司がつとめた。集る会員は宮太郎会長以下三十余名、会長以下玉串奉典の上厳肅にとり行われた。

総会は午後六時から金沢ニューグランドホテルで開催、百五十人の会員及び旧師が出席、宮会長の挨拶につづいて、大高泉丘校長から学校の近況報告があり、引きつづき西多事

務局長から同窓会の現況報告、会員名簿発刊の結果報告、前年度の会計決算報告を承認して祝宴に移った。

柴野和喜夫元知事(一中27回卒)の乾杯音頭で開宴。青春の日々の思い出に花が咲く一夕で盛会裡に八時散会した。

◇関東一泉同窓会総会

関東一円の在住者を以て組織する関東一泉会では十月二十六日午後六時から、東京・神宮球場前の日本青年館に於て総会を開いた。

まづ、明治、大正の卒業の先輩を全員拍手で会場に迎え入れ、北山雅義氏(昭和23年卒)の司会で鏑木政岐会長が「93才の吉田一郎さんも出席されたが北山、北野氏らの若い人たちの世話でこの会も昨年以上に盛大になった。是非一中の伝統を受けついでほしい」と挨拶があった。

金沢の一泉同窓会本部より出席した西多事務局長から母校の近況、同窓会の現況、旧師の「日置謙先生研究」(山森青祝著)の本を同窓会にて発行した、との報告があり、吉田一郎氏の乾杯で開宴、一泉同窓会讃歌(作詩作曲・野本正作・昭和29年卒)の発表や、中山登紀子(女流新人賞)のスピーチ、約三百二十名の賑かな歓談の間に加賀とび、山中節など歌が出て盛会だった。

◇一泉同窓会東海支部総会

一泉会東海支部では九月二十九日午後五時から名古屋市千種区王山会館で54年度総会を開いた。この日、本部から西多事務局長も出席、まづ前田秀之会長のあいさつにつづいて西多氏から最近の泉丘高校の状況、及び同窓会の現況についてお話があり、沖野永保副会長の諸般の報告、会員の自己紹介があり、引き続き席上役員の改選が行われた。その後記念撮影があり、懇親会に移った。和

気あいあいのうちに歌、詩、手品などのかくし芸が次から次と披露され最後に校歌合唱して午後八時散会した。なお改選された役員は次の通り。会長 前田秀之 副会長 米原佐市 横越英一 沖野永保

◇眉寿同窓会

一中二十五回(大正七年卒)生で組織する眉寿会では十月二十五日物故者法要と眉寿祝賀会を開催した。

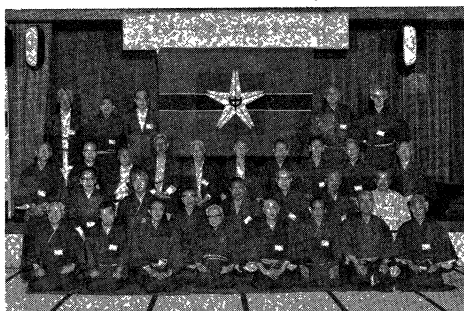
法要は午後二時から材木町静明寺で執行し物故者七十八名の法要を導師大橋俊信師にて厳肅に行われた。つづいて午後五時から東御影町の東山ホテル金閣で眉寿祝賀の宴を開いた。当日の参集者は次の十三名

今村、太田、北、北川、小島(栄) 小島(勇)、高、芝田、高田、中山 牧山、嶺、米沢

◇金沢一中32回生全国大会

大正十四年に一中を卒業した32回生全国大会が五月十三日山中温泉八松苑で開催された。

地元を始め、東京、横浜、和歌山から旧友が集まり、総勢三十二名全員が揃った。物故者に黙禱を捧げたあと太田幹事の挨拶で開会、恩師鏑木先生から一中、泉丘での教職から現在に至る感銘深い挨拶、幹事から卒業生百五十五名中生存者七十七名との報告があった。



出湯太鼓、山中節の余興を楽しみながら往年を懐かしみ杯を交えた。最後に又野応援団長のリードで一中校歌を合唱、万才三唱で閉会、なお来年は関東地区で開催することを決めた。

◇金沢一中三三会全国大会

一中を大正十五年に卒業した人達で組織する三三会では五月十三日、静岡県伊豆修善寺温泉の清月荘金龍で、54年度全国大会を開催した。

今回は東京在住者が幹事となり、恩師一名、生徒二十四名、同伴夫人五名が集まった。遠くは北海道から来会し、意気大いに上り、恩師や級友の消息の報告に、また思い出話に大正の少年時代に帰ったひとときであった。

◇在京金沢一中36期生同窓会

在東京一中36期生同窓会は十月二十五日午後五時半から明治神宮前、青山ダイヤモンドホール四階「日本間」で開催。十五名が参加した。

互いに無事健康を祝しあい、欠席者や物故者の消息を語り合い、歓談はいつまでも尽きなかった。

◇金沢一中37期五十周年記念大会

昭和五年卒の金沢一中三七会が本年卒業五十周年を迎え、記念全国大会を開催した。九月二十八日、金沢在住の竹田長松、黒田辰夫氏等数名の幹事役にて市内慶覚寺に於て物故会員の法要を営み、今は亡き友の慰霊を行った。

その後一同車に便乗し市内の各所を廻り、五十年ぶりに見る金沢の街に驚く会員、最後に母校の泉丘高校を訪れ、会場の粟津温泉・法師に向つた。懇親会は竹田氏の挨拶に始まり旧師を囲み、話は尽きず終夜に及んだ。

◇金沢一中六校友会総会

一中を昭和六年に卒業している人々で組織する六校友会では卒業以来毎年行っている総会を八月十八日、錦木、宮沢の両先生を迎え、金沢市蛤坂山錦楼で開催した。この日、遠く横浜、静岡から友田、奥原の両君が馳せ参じ、総勢三十名の盛会となった。今度授賞に輝く千間武二、また叙勲に光る江戸重富の両君に村中博明会長より賀表と記念品が贈呈され、拍手をもって栄誉を称えた。あれこれ話題が尽きず来る五十周年大会には是非元気で顔を合わそうと誓い、小坂君の桜章の応援旗で校歌合唱散会した。

◇一中七校友会五十四年度総会

一中七校友会(昭和7年卒)は十月十五・六日の両日、山代温泉白雲閣で54年度の総会を開いた。

山瀬、岩脇、福田の三氏が幹事となり地元金沢を主とし、東京、大阪の各地から三十数名の会員が馳せ参じた。山瀬氏の司会により挨拶と経過報告があり、岩脇氏の音頭で乾盃して開宴、積る話に一夜を明かし、次年の再会を約して十六日散会した。

◇金沢一中41期全国大会

昭和9年卒の41期生全国大会が八月十八、十九の両日、金沢市香林坊の「富士久」で催された。

会誌発行や写真集の編さん、慰霊祭などの企画を裏付けした全国大会とは趣を一寸かえ、今回は肩のこるような催事を抱き合せず、気楽に集った。年のせいか、それが大勢の希望で全国から四十四名の会員が参加し盛大だった。

「同窓会」という番組で一月二十三日にMROで放映され、好評だった41期出演のビデオを映し、感を通じ、翌日は応援歌を合唱。今回は本年関東の諸兄が担当することを決めて散会した。

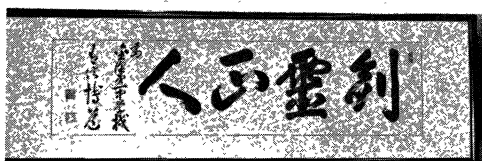
◇一中十校友会全国大会

一中42期生(昭和10年卒)では金沢一中十校友会の名称で毎年全国大会を催し、会員の親睦をはかっているが、こしは十月十四、十五日、片山津温泉ホテルながやまで五十四年度全国大会を開いた。大会に先立ち中側、鴻野、久保田、大森、高木、諸江、戸田、久間の諸氏が白山コースでゴルフを楽しんだ。総会では、十校友会の今日の発展に尽くされた野村敏夫会長が惜しくも他界、後任会長に吉沢英雄氏、副会長に坂本六郎氏を選出、明年の関西での全国大会に再会を約し、盛会裡に別れを惜しんだ。

出席者は恩師の宮沢、藤田、塚野の三氏、会員は関東、関西、九州等より四十六名。(井口記)

◇金沢一中在京四三会大会

四月八日午後二時から東京赤坂のホテルニュージャパンで一中43期生の在京クラス大会を開催。医学会出席のため上京中の谷一郎氏も参加、河毛一郎氏持参の旧一中校歌や応援歌を収録したカセットをバックグラウンドミュージックに流しながら、四十年前の本多町時代の青春回顧談に春のひとつときを過ごし盛会の中に午後四時散会した。



修復を了えて再び体育館にかかけられた額 中山博道書



旧金沢一中の剣道場に掲げられていた養浩堂の額を修復す
(陸軍大将 大島久直書)

◇一四四六回生卒業四十周年クラス会

一四四六回生（昭和14年卒）では本年で卒業四十周年を迎えることになり、九月八日金沢スカイホテルで大会を開いた。大会には地元金沢をはじめ東京、大阪など全国各地より六十三名が出席した。幹事太田定夫氏の司会で物故者に黙とうをささげ、青梅洪治氏の開会挨拶、卒業以来40周年を迎えた今日、ますます壮



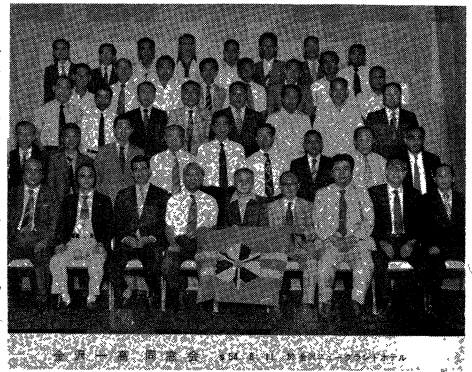
◇金沢一中54期同窓京都大会

昭和22年卒業の同期生の関西、中京地区在住者による同窓京都大会（朱木会）を三月二十四日京都駅前近鉄百貨店特別室で開催した。

金沢からも十数名の参加を得て三十三名が参加、卒業以来三十年ぶりの再会者もあり旧交を温めた。懇親会は山田氏の挨拶にはじまり、石田氏から祝辞、つづいて先般北陸放送の「テレビ同窓会」に出席したこと

◇金沢一高卒30周年大会

旧一高は学制改革時の混乱期に発足した。泉丘校の前身、県下の各学校より集って編成されたもので、昭和24年に卒業後、泉丘高校に改名された。卒業以来30周年を迎え、久しく音信が絶えていたが、母校の同窓会名簿が新しく発刊された機会でもあり、会員の消息を吉竹毎詠氏が丹念に調査した結果、始めての同窓会を催した。八月十一日夕六時から金沢市の金沢ニューグランドホテルにて。この夜、旧高校時代を偲び併せて三十周年記念の行事とともに旧師を中に氣勢をあげた。応援歌の



あと再会を約して散会する。

出席者は恩師土橋、蓮池、松村氏他会員は全国より四十五名が参集した。

◇泉丘二期（昭和25年卒）三十周年記念大会

泉丘高校卒業三十周年を迎えた泉丘二期生では八月十一日母校で同窓会総会を開いた。

当日、全国各地からの参加者が校庭にある厳霜碑の前に集い、同窓の高森友成住職の説教で物故者11名の追悼法要を行ったあと、鏝弘子さんの経営するセンチリーブラザに移り、夕六時から総会を開いた。まず普神貴行幹事から記念事業として、一中校より伝わる加納治五郎書「勤是楽」の額を表装替えて母校の図

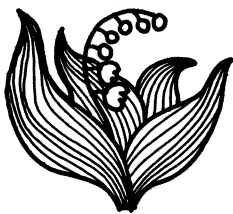
書室に掲げるとの報告あり、また北氏から「学校時代の思い出を掘りおこす記念誌の発行」などの行事報告あり。

ついで高堀恩師から「一中に入學一高で学び泉丘高で卒業したこの期は私の教員生活で一番思い出の深い生徒たちである」との挨拶があり、このあと福田尚造恩師の乾盃の音頭で懇親会に入った。当日の出席者は恩師を含め七十名の盛会であった。

◇泉丘高五期生会

四月二十一日午後四時から、東京日本橋本石町のヨードルで東京在住の泉丘四期生が卒業後二十六年ぶりのクラス大会を催した。金沢から秋谷、中越、横井三女性と西尾、村山、浜上三君が出席四十二名が集った。高校時代を懐かしみ八時の閉会まで大いに語り合い、今後東京と金沢で隔年毎にクラス会をもつことを決めて散会した。

健で活躍することを互に喜び合つての乾盃から懇親会に移った。会員は旧師を囲み、懐旧談に花を咲かせた。尚四十年の歩みを綴った文集の発行を計画、近く会員に配布することに決った。



◇泉十回泉寿会大会

昭和三十三年卒の同窓会「泉寿会」では卒業二十周年を記念して、関東地区在住者約七十名で泉寿会関東分会を設立することとなり、このほど東京、新宿区船原町「家の光」ビルで岡本章氏等十二名の発起により設立総会を開いた。

金沢から旧師西野哲也先生、金沢泉寿会から杉野好宏世話人が出席、在京同窓約五十人が一堂に会して近況を交換、二十周年を祝福した。

◇泉丘十一期全国大会

泉丘11期卒は本年で卒業20周年を迎えた。

これを機として八月十二日金沢ニユーグランドホテルに於て二十周年記念大会を開催した。長谷勝彦氏の司会で井波豊英世話人代表、布山清吉先生の挨拶のあと応援団員のリードで歌や手拍子と賑やかに一刻を過ぎ、八時市野先生の万才三唱で散会した。なお母校校庭に松の木を記念に植樹した。



支部便り

東海一泉会便り

寒冷の候、皆々様には如何お過ごしでございますか。

さて、昨年9月29日(土)、名古屋市中心区の王山会館で、昭和54年度(第七回)の総会を開きました。本部から、西多事務局長もご出席になられ、まづ、会長の挨拶、西多氏から最近の泉ヶ丘高校の状況などについてのお話があり、東海支部からの諸般の報告、役員改選などあり、33名会員(女性5名)の自己紹介、写真撮影をし、懇親会に移った。和気あいあいのうちに、昔の思い出など話し合い、歌、詩吟、手品などの隠し芸が次々と披露され、最後に校歌合唱して散会した。

《改選役員》会長 前田秀之、副会長 米原佐市、横越英一、沖野永保
《主な会員の移動》東海支部の生みの親である荏原商事支店長の杉田賢四郎常任幹事が、東京営業本部にご栄転、大西常任幹事は、(株)第一ビルディング取締役高松営業所長にご栄転された。

80年代は益々厳しく、我々一泉同窓会東海支部のメンバーは、お互に手を取りあって更に結束をかため、

この危機を乗り越える覚悟で頑張っています。

一泉同窓会皆々様の益々のご多幸とご発展をお祈り申し上げます。

◇東海一泉同窓会の事務局が移転

名古屋地区を中心とした東海一円の卒業生にて組織している東海一泉同窓会(前田秀之会長・大正九年卒)では昨年秋季に事務局を左記に移転した。

名古屋市中心区末盛通1-19

ニュー王山ビル3F

中部産業近代化研究所内

☎(〇五二)七六二二二〇〇代



「関東より愛をこめて」 関東一泉会便り

全国の一泉同窓会の皆さん、元気かいね。関東一泉同窓会は達者でやとりみす。

会員だけでも六千人は、東京横浜千葉埼玉へ集つとつて、名前調べて手紙出すだけでも転手古舞や。大変やぞ!

関東一泉会は、一中の名物先生「デモ」こと故吉野勝太郎先生が十何年も昔から石川県学生寮の寮長をやりになつた合間に始められて、毎回百人近い人が集つておりました。東条英機の懐刀だった故佐藤賢了中将も、日軽金社長故安田幾久男先輩も、その他政界、財界、官界、学界の名士方達もちよく顔出しされとりみした。故吉野先生が数年前亡くなられてから、二年間中断しとつたが、俊英鏑鏑木四兄弟の一人、東大天文学博士の鏑木政岐先生のご熱意とご尽力で「関東一泉会」をまたやるまいかと若い人が中心となつて、一昨年から復活させ去年の秋は三百人も集つたがいね。会員には珍しい人もあつて、女流作家の中山登紀子さん、「天皇の料理番」「夕陽將軍」など伝記作家で、国際ペンクラブの副会長、杉森久英

先輩、宮内庁時代皇太子殿下、美智子妃殿下の世紀の大ロマンスをまとめた瓜生順良先輩を始め、今も各界で大活躍の異色の方々を含み、豪華な顔ぶれやぞ！ 去年の秋の一泉同窓会では会場はあふれんばかり三百人の熱気むんむん、テーブルには芝すしの押し寿司に、福正宗の酒をくみかわし、どじょうのカバヤキを喰いつき、これが大好評、これを食べる為に毎年この会に出んならんと言つとる人もおったがいね。

(誰やら加賀万才をやつたし、加賀宝生も加賀の女も出て、とつしよりも若いじゃーまもよう飲んで騒いどつたわいね) (関東一泉会は、男性百人女性二百人と女性上位時代の象徴か、圧倒的にチャーマが多くて、オットロシゾ！)

神宮の森の一角に聳える日本青年館の大宴会場は、六時から始つて九時近くまで話しはつきない。

九時を過ぎて、青山六本木新宿、歌舞伎町、銀座へと、クラス、グループ、先輩後輩肩組み合つて、カラオケ、ダンスに飲み明かす。

今年の秋も、関東一泉会は、元気にやります、金沢からも、大阪も名古屋もみんな一回、関東へいらつし、きまつし、よるまつし、まつとるがいね。(関東一泉会M・K生)

一 泉同窓会讃歌

春爛漫の

作詞作曲・野本正作(泉6回)

一、春爛漫の泉原

桜を薫る我が母校
集いし時も今はるか
人世は瞬時の夢なるや

二、医王の嶺を仰ぎつつ

冽き流れの犀川に
心を浸し結びたる
我等が契り固からん

三、世は虚いにあけくれて

さまよい惑わんことあれど
我に確たる友あらば
針路自ら拓かれん

四、いざ先輩よ今宵こそ

盃かわし腕組みて
声高らかに謳うべし
あの一泉の意気高し

同窓会通信

泉丘校舎改築今春から

母校、泉丘高校の校舎改築の気運が愈々たかまり、今春より旧校舎の一部の取りこわしが予定されることになった。

現校舎は昭和十二年、本多町の旧一中校舎から当時泉野の一面の畑地の中に建築されたもので、当時の画一的な学校建築様式を避けて旧一中

の歴史、伝統を象徴する形式をとつたものといわれている。

今般の改築にあたっては、更に一段とこの意をとり入れ、真に名門校にふさわしい構想になるとのこと。

「日置先生研究」

一 泉同窓会にて発行

金沢市出身の郷土史研究家、日置謙氏の研究発表を、このほどその教え子の山森青硯氏(金沢一中大正15年卒)の手で発表され、著書として一泉同窓会より発刊された。日置氏は明治38年から大正15年まで一中教諭として勤務され、郷土史家として石川県史の編さんに携わつた。一泉同窓会では先生の偉大な業績をあらためて世間に知ってもらおうと昨年から計画していた。序文には当時の教諭の鏑木勢岐氏(尾山神社宮司)が執筆。領布は郵送料を含めて五百円で一泉同窓会本部へ申し込まれた。

桜美会第七回展

金沢一中、泉丘高校の旧師並びに同窓生の美術家及び同好者でつくる絵の同窓会の桜美会(石田直行代表 斎藤弥吉事務局長)は、その第七回展を十月四日から八日まで金沢市大和デパートの文化ホールで開催、鏑木勢岐、原田太乙、西出大三、宮沢外与治、堀義雄、中村秀雄、隅谷正

峰、小松曉一、判三教、島田徳三氏らほか八十人の会員が力作を並べた。連日入場者が多く好評であった。

古本ウエブスター辞典など

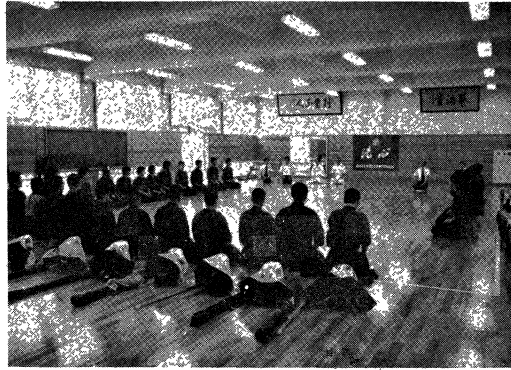
稀覯本蔵書目録づくり進行中

旧金沢一中より引きついた泉丘高校図書館では藩政期の貴重な和漢書、唐本、外書などを多数所蔵している。これら稀覯本を載せる蔵書目録の製作が順調に進み、今春完成の見込となった。調査の過程では日本最古といわれるウエブスター大辞典なども発見されている。この蔵書目録の製作は一昨年五月から本格的に始まり郷土史家山森専吉氏(金沢一中第三十三回卒)を中心に本校教師十数名をメンバーとする同目録編さん委員会が進めている。

蔵書は和漢書、和算書、唐本、それに一八六〇年(万延元年)前後発行の外書で約千五百部、八千五百冊。ウエブスター辞典のほか、慶長15年古活字版太平記(二十一冊)や、輸入された国際法規書の万国法(元壮猶館文庫蔵)などが含まれている。教師らの進めてきた目録カードを山森氏がまとめ、蔵書全体の解題や蔵書の集書由来、沿革などの解説に専念。目下、これ等の委員の方々は熱心に編纂事業と取り組んでおられる。

一 泉剣友会が新発足

旧金沢一中及び泉丘高校剣道部出身のOB会を以て昨年八月「一泉剣友会」が新たに発足した。これは会員相互の親睦を計り剣道精神の練磨修養に努めると共に、母校剣道部の発展と援助することを目的としたものである。



待望の第二体育館完成

母校泉丘高校の第二体育館がこのほど竣工し、六月三十日落成式が行われた。式には教職員、生徒、同窓会、PTAなどの役員らが出席、大高校長は「第二体育館はかねてからの念願だった。第一体育館とともに大いに活用、体育の振興に努めたい」とあいさつし、このあと小川同窓会副会長らが祝辞をのべた。

同体育館は鉄筋コンクリート二階建、一階は柔道場、剣道場、卓球場の三室に分けられ、広さは九百十二平方メートル、二階は球技場で九百十三平方メートル。バドミントン四面、バレーボール二面がとれる。式後、柔剣道、卓球などの交歓試合が行われた。

金沢中央卸売市場一泉会

会員は旧養浩会々員と剣泉会々員が中心となり広く同志を募り結成した。昨年七月母校にて第二体育館の竣工を機に大会を催し、会長に太田真一氏（大正十四年卒）副会長に別川七造氏（昭和五年卒）坂本三十次氏（昭和十五年卒）事務局長に高川義一氏（昭和二十年卒泉丘教諭）を選んで今後の発展を期して閉会した。

中央市場を横に結ぶ親睦団体として昨年三月、市場関係者で組織する旧金沢一中及び泉丘高出身者の親睦会「金沢中央卸売市場一泉会」が発足した。会員は二十三名で新発足を祝う懇親会を市内の大八で開催、会長に市場自治組合理事長の成瀬清次氏（昭和八年卒）、副会長に平石英雄氏（昭和九年卒）を選んだ。この同窓会は市場関係者の組織として相互の親睦と協力をはかり、中央市場及び会員の発展に寄与したいというのが目的。

五十四年度同窓会費を納入の期(55・3・1現在)

第22回 委員

39 38 37 36 35 33 31 29 28 26
" " " " " " " " " " " "
山瀬芳雄 加藤俊男 竹田長松 笹井富雄 木下久雄 吉田直茂 高島弥生 野口鎮雄 角谷義一 松尾宝作 四井謙次

第40回 委員

56 55 54 53 51 50 49 47 46 45 44 42 41
" " " " " " " " " " " "
小堀広 牧沢善二 井口鉄男 吉村正信 石崎皓三 太田定夫 大藏吉夫 齊藤弥吉 浅香正男 佐野豊 高川義一 矢来正 川北篤 普神貴行

泉6回 委員

17 15 13 11 10 8
" " " " " " " " " " " "
中谷道子 福田太睦 杉野好広 井波豊英 本野雅隆 吉田憲司 福田雅幸 以上各期から本年度一泉同窓会の運営の資金として会費の納入をいただきました。未納の期に於いても当会の今後の運営のためご協力のほどお願い申し上げます。(事務局)

同窓先輩の消息調査に協力を!!

一泉同窓会事務局においては昨年十年ぶりに名簿を発行したが、発行に際し準備期間の少なかつたせいもあり、充分な調査の出来なかつた点に相当あつた。その後相当数の消息判明した分もあり、目下その整理にあたっています。

そのなかで41期卒の平石英雄氏より好意的なご協力があり明治年代、大正初期の卒業生の調査に精力的な調査をしていただき、消息不明の先輩で今日迄百五十三名の死亡確認と不詳者の内居所判明した先輩七十三名を発見することが出来ました。尚同氏には今後共、この調査を続行していただき、その努力に感謝をしております。

同窓の各位におかれても、消息不明の会員で、その後判明した分は是非本部宛にご連絡下さい。

あ と が き

かねて卒業各期の方々との交流の機関をもうけることを念願としておりましたところ、どうやらこの度、その第一歩として「一泉」の発刊が出来ました。この機関誌もせめて年に一回皆様のご賛同を得て発行したいものと念じています。この「一泉」が私等の母校の現況や同窓各位の活動ぶりをお知らせすると共に、これが更に私等の後輩諸君への励みともなれば幸いと思います。

表紙の「一泉」の題字もその意味をこめて大高彰八校長にお願いしました。

今後各位のご支援をいただき第二号が発行出来ますようご協力をお願い申し上げます。(事務局・西多記)